

保育者を目指す学生の乳児養護体験と困難に感じる 沐浴技術内容との関係

The Relationship between the Infant Care Experience of Students Aiming to Become
Childcare Providers and the Bathing Technique Aspects That They Find Difficult

永瀬悦子*

Etsuko Nagase

As it is considered quite essential in recent years to develop young people's child-rearing abilities (parenthood preparedness), this study focuses on the care experience and care techniques of students aiming to become childcare providers, with the objective of identifying relationships between their infant care experience and the aspects of bathing techniques that they find difficult. Questionnaires were collected from 124 female students in their second year of a junior college childcare provider training course. As a result, the factors, "techniques relating to accidents," "techniques for holding the head and neck," "techniques for supporting the doll's weight," and "techniques for observation while bathing" were extracted from the bathing techniques that they found difficult, and students who had no experience of caring for infants indicated more difficulty in "techniques for supporting the doll's weight" than students who had one or two times' experience.

I. はじめに

中央教育審議会(2000)¹⁾では、少子化社会の中で子どもと実際に触れ合う体験の乏しいまま親になる者が増加する傾向にあり、子育てに関して身近に相談相手がおらず、子育てに不安を感じる母親が増えていることを指摘している。現代の母親は、親になる前に子どもと遊んだり世話をしたりした経験がなく子育て方法をほとんど知らないまま親になることを指摘されている(原田2006)²⁾。「子育て支援」を担う保育者を目指す学生も将来母親となる女性とみるならば、現在指摘されている女性像とそう違いないと推測する。子育て支援は、親の子育て負担の軽減だけではなく、親の子育て能力の向上と親自身が成長するような支援が課題とされている(中野2001³⁾、柳瀬2002⁴⁾、小川2002⁵⁾)。

保育者養成課程における学生たちも生活体験の乏しいと推測される。このような学生もやがて保育者となり、子育てに不安を感じる母親に対して専門職として相談・支援していく役割を

* 幼児教育学科

担う。保育者養成課程における保育・教育の実践力を育成させるための教育は重要課題である。

このような子育ての要因として「養護性」がある。養護性はFogel, Melson & Mistry (1986)⁶⁾により理論化されたnurturanceに由来している。nurturanceは小嶋 (1989)⁷⁾が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義した。この定義を用いれば、養護性は、子どもの世話だけではなく多様な発達を促す経験により育成されていくことを示唆している。

幼児期から成人女性の養護性の発達過程を示した研究(小川他2010⁸⁾, 榎澤2011⁹⁾¹⁰⁾がある。また、女子大学における親準備性を示した研究(榎澤他2009¹¹⁾, 井森・岩治2010¹²⁾, 岩治・井森2010¹³⁾, 川瀬2010¹⁴⁾, 岩治他2011¹⁵⁾, 扇原・首藤2016¹⁶⁾, 松本・佐藤2018¹⁷⁾)もある。「養護性」は様々な研究で取り上げられており、幼い子どもとの接触経験や保育に関する学習体験は養護性を高める要因であることが示唆されている。幼い子どもへの愛情・関心・世話をしたい気持ちといった養護性は男女共、乳児の世話をした経験の多少により決まることが明らかにされている(花沢・松浦1986)¹⁸⁾。また、大学生を対象とした調査で親になる意識に肯定的影響を与える要因には良好な親子関係、幼い子どもとの接触体験があり(松岡他2000)¹⁹⁾、子どもの世話の経験がない大学生は対児感情の回避得点が高いことが報告(北村2012)²⁰⁾されている。

しかし、養護性と養護技術(保育)との関係性については散見するのみである。養護性と養護技術との関係をみていく変数を定めることは難しく、今後の組織的に研究をするための探索的研究が必要である。

そのような中で、保育者をめざす学生を対象に新生児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係をみた研究(永瀬2020)²¹⁾がある。そこでは、困難に感じる沐浴技術内容には、頭・首を保持する技術、人形の重さを支える技術、沐浴をしながら様子観察をする技術があることを示し、その技術と新生児をあやした体験得点と見た体験得点、世話した体験得点に有意差が示されたことを報告している。しかし、それは新生児養護体験と沐浴技術内容との関係をみており「新生児期」と限定している。保育は乳幼児期を対象とすることから、月齢・年齢幅を広げた対象の養護体験を見ていく必要がある。乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係を明らかにすることは、生活体験が乏しいといわれている学生に対する教育の質の向上に寄与すると考える。

以上を踏まえ、保育者をめざす学生の乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係を明らかにすることを目的に以下の2点を検討する。

1. 保育者をめざす学生が困難に感じる沐浴技術内容を抽出する。
2. 乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術との差をみる。

本稿における「沐浴技術演習」とは沐浴技術内容を模擬的かつ総合的に体験することで沐浴技術を習得する過程である。教員が沐浴人形を用いた実演の見学後に、学生が沐浴を行い、衣

服の着脱及び抱っこをする過程には、沐浴の準備・片付けも一連の過程として含まれている。また、「乳児」とは生後4週間以上1年未満の子どもとする。

II. 方法

1. 研究対象

保育者養成課程であるA短期大学2年生の女子学生134名を対象として質問紙調査を実施した。当該短期大学の学科においては、保育士資格と幼稚園教諭2種免許を一緒に取得するコースを設けており、ほとんど全ての学生が両方の資格取得を希望している。質問紙は134部配布し、回収率は128名あったが、不備のあったもの4名分を除いた。有効回答数は124名(92.5%)であった。

2. 調査期間

2017年5月上旬

3. 沐浴技術演習の概要

1) 既習学習について

沐浴技術演習は、2年次の「子どもの保健Ⅱ(演習・1単位)」の科目で行っている。関連する教科目の既習学習は、保育の心理学Ⅰ(2単位)、教育心理学(2単位)、子どもの保健Ⅰ(4単位)、乳児保育(2単位)である。また、実習については教育実習Ⅰ(演習・1単位)・教育実習Ⅱ(1単位・1週間)・教育実習Ⅲ(1単位・1週間)と保育実習Ⅰ-1(2単位・10日間)を終えている。

2) 沐浴技術演習の方法

沐浴技術演習は、担当教員が沐浴人形を用いてベビーバスを使用した沐浴方法を手順や留意点を説明しながら実演する。衣服の着脱、オムツ交換、抱っこ等も一緒に実演する。

その後、各グループに分かれ、授業時間90分内に、学生一人ずつ沐浴・衣服の着脱の一連の過程を実践する。その際、新生児の体型をしている沐浴人形(高研(株)コウケンベビー)を使用する。学生は4クラス編成で1クラスが30名前後である。1グループが4~5名である。沐浴技術の指導には、教科担当教員1名(助産師・看護師免許取得している)と保育士・幼稚園教諭資格を取得している教員2名が担当した。学生は沐浴・衣服の着脱と準備(必要物品やベビーバスの湯の準備等)を1回ずつ体験する。

4. 調査内容

1) 対象者の属性

学生の背景を理解するため、年齢と兄弟、姉妹の人数、3歳以上年下の兄弟の有無、乳児養育体験(見たことがある、触れたことがある、抱いたことがある、あやしたことがある、世話をしたことがある)とその体験頻度(ない、1～2回、3回以上)を質問した。

困難とを感じる沐浴技術内容は、「看護学生・幼児教育学科学生が難しいと捉えた沐浴技術・遭遇場面」(木下・谷野2013)²²⁾の自由記述の結果を参考にして筆者が作成した18項目である。各項目についての評価尺度は「非常にそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「少しそう思う」を2点、「そう思わない」を1点として4件法で回答を求めた。

5. 調査方法

沐浴技術演習実施後に、倫理的配慮の説明を行った後に質問紙調査を実施した。研究室及び教室の後方に質問紙回収箱を置き、各自が自由投函できるような配慮を行った。

6. 分析方法

本研究における一連の統計処理には、IBM SPSS25 for Windows を使用し、その結果の統計的有意差については危険率5%未満の水準で、有意傾向については5%以上10%未満の水準で判定した。

- 1) 年齢、兄弟・姉妹の人数、3歳以上年下の弟・妹の有無、乳児養育体験(見たことがある、触れたことがある、抱いたことがある、あやしたことがある、世話をしたことがある)とその体験回数(ない、1～2回、3回以上)に関しては単純集計を行った。
- 2) 難しいと感じた沐浴技術内容の因子分析を行い、因子構造を確認した。各因子間の2変量相関を求めた。
- 3) 乳児養育体験得点(見たことがある、触れたことがある、抱いたことがある、あやしたことがある、世話をしたことがある)を独立変数、困難と感じた沐浴技術内容(因子)を従属変数とした多変量分散分析を行った。

7. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究協力者に対し研究目的・方法の説明をした。データは機械的・統計的に集団で処理されるため個人が特定されないこと、匿名性の確保、調査協力は任意であり、協力しないことで不利益を被ることはないこと、成績とは無関係であること、質問紙への回答をもって調査協力への同意が確認されることを文書及び口頭にて説明をした。

Ⅲ. 結果

1. 調査対象者の属性

対象者の属性は表1の通りである。対象者は全て女性であり、平均年齢は19.2歳であった。19歳(90.3%)が一番多く、次いで20歳(7.3%)であった。兄弟・姉妹の人数は「2人」が一番多く69名(55.6%)、次いで「3人」が39名(31.5%)であり、「自分一人」は6名(4.8%)であった。「3歳以上年下の弟・妹の有無」は「あり」が47名(37.9%)、「なし」が77名(62.1%)であった。乳児養護体験を問う項目では、「乳児を実際に見たことがある」が「3回以上ある」76名(61.3%)が一番多く、次いで「1～2回」37名(29.8%)であった。

「乳児に触れたことがある」では「3回以上ある」71名(57.3%)が一番多く、次いで「1～2回」39名(31.5%)であった。「乳児を抱いたことがある」は「3回以上ある」64名(51.6%)が一番多く、次いで「1～2回」38名(30.6%)であった。

表1 属性

		属性 (n=124)	
項目	人数 (%)	項目	人数 (%)
《年齢》		【乳児を見た体験】	
19歳	112名 (90.3%)	なし	11名 (8.9%)
20歳	9名 (7.3%)	1～2回ある	37名 (29.8%)
22歳	1名 (0.8%)	3回以上ある	76名 (61.3%)
23歳	1名 (0.8%)	【乳児に触れた体験】	
31歳	1名 (0.8%)	なし	14名 (11.3%)
《兄弟・姉妹の人数》		1～2回ある	39名 (31.5%)
自分一人	6名 (4.8%)	3回以上ある	71名 (57.3%)
2人	69名 (55.6%)	【乳児を抱いた体験】	
3人	39名 (31.5%)	なし	22名 (17.7%)
4人	10名 (8.1%)	1～2回ある	38名 (30.6%)
《3歳以上年下の弟・妹の有無》		3回以上ある	64名 (51.6%)
あり	47名 (37.9%)	【乳児をあやした体験】	
なし	77名 (62.1%)	なし	26名 (21.0%)
		1～2回ある	42名 (33.9%)
		3回以上ある	56名 (45.2%)
		【乳児を世話した体験】	
		なし	47名 (37.9%)
		1～2回ある	28名 (22.6%)
		3回以上ある	49名 (39.5%)

※()内は総数に対する比率である。小数点第四位で四捨五入した。

2. 困難に感じた沐浴技術内容の因子構造

困難に感じた沐浴技術内容14項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果及びフロア効果の有無を検討したが該当する項目がなかったため、14項目全部に対して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と因子項目の傾向から4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を仮定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量.35未満の項目を除いた。最終的に残った11項目の因子分析を行った結果、4因子を抽出した。[]は質問項目を表す。

第1因子は「湯の温度の調整が難しかったと思う」「やけどの危険がありそうで難しかったと思う」「人形の衣服の着脱が難しかったと思う」「顔・鼻・耳に水がかかると難しかったと思う」など、熱湯による火傷や衣服着脱による脱臼、水に入る溺水などといった事故に関連した危険が想定されたため「事故予防に関連する技術」と命名した。第1因子のクロンバック α 係数は.77であり、内的整合性が高いことを確認した。

第2因子は「首の固定が難しかったと思う」「頭部の支えが難しかったと思う」など、首の座りのない子どもの首と頭部を固定することの困難さを表現しているため「頭・首を保持する技術」と命名した。第2因子のクロンバック α 係数は.90であり、内的整合性が高いことを確認した。

第3因子は「沐浴をしていると支える手が重いと思う」「人形を重いと思う」など、人形を支えながら沐浴をする際に感じる人形の重さを表現しているため「人形の重さを支える技術」と命名した。第3因子のクロンバック α 係数は.83であり、内的整合性が高いことを確認した。回転後の各項目の因子負荷量を表2に示す。

第4因子は「皮膚の観察と沐浴を同時に行うことが難しかったと思う」「沐浴の時に人形の顔を見ることが難しかったと思う」「声をかけることが難しかったと思う」など、沐浴をしながら子どもの様子観察を同時に行うことの困難さを表現しているため「沐浴をしながら様子観察をする技術」と命名した。第4因子のクロンバック α 係数は.73であり、内的整合性が高いことを確認した。

保育者をを目指す学生の乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係

表2 困難に感じる沐浴技術の因子分析結果と因子間相関

	M (SD)	I	II	III	IV	共通性
第I因子：事故予防に関連する技術 (α係数=.77)						
湯の温度の調整が難しかったと思う	2.74 (.79)	.80	.01	.09	.04	.41
やけどの危険がありそうで難しかったと思う	2.43 (.86)	.68	.12	.03	.05	.39
人形の衣服の着脱が難しいと思う	2.49 (.81)	.68	.15	.04	.04	.40
顔・鼻・耳に水がかかると難しかったと思う	3.17 (.76)	.41	.01	.07	.23	.34
第II因子：頭・首を保持する技術 (α係数=.90)						
首の固定が難しかったと思う	3.11 (.64)	.06	1.02	.06	.08	.68
頭部の支えが難しかったと思う	3.18 (.66)	.08	.78	.08	.12	.69
第III因子：人形の重さを支える技術 (α係数=.83)						
沐浴をしていると支える手が重と思う	3.10 (.76)	.03	.01	.96	.03	.56
人形を重と思う	2.98 (.90)	.04	.02	.75	.00	.52
第IV因子：沐浴をしながら様子観察をする技術 (α係数=.73)						
皮膚の観察と沐浴を同時に行うことが難しかったと思う	2.96 (.78)	.00	.05	.06	.77	.39
沐浴の時に人形の顔をみることが難しかったと思う	2.35 (.96)	.04	.04	.02	.56	.40
声をかけることが難しかったと思う	2.59 (.94)	.20	.13	.02	.64	.37
	因子間相関			.21	.29	.66
					.42	.32
						.28

3. 各因子間の相関

学生が困難に感じる沐浴技術の影響要因を考察するために、「事故に関連する技術」「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」「沐浴をしながら様子観察をする技術」の各変数間の相関関係を検討した。その結果は表3に示す。

その結果、「事故に関連する技術」と他の因子との関連については、「人形の重さを支える技術」($r=.235, p<.01$)、「沐浴をしながら様子観察をする技術」($r=.566, p<.01$)は有意な高い正相関を示した。「頭・首を保持する技術」と「人形の重さを支える技術」($r=.375, p<.01$)、「沐浴をしながら様子観察をする技術」($r=.291, p<.01$)は有意な高い正相関を示した。「事故に関連する技術」と「頭・首を保持する技術」($r=.202, p<.05$)は正相関を示した。「人形の重さを支える技術」と「沐浴をしながら様子観察をする技術」($r=.211, p<.05$)は有意な正相関を示した。

保育者をめざす学生の乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係

表3 各因子間の相関係数

	事故予防に関連する技術	頭・首を保持する技術	人形の重さを支える技術	沐浴をしながら様子観察をする技術
事故予防に関連する技術		.202*	.235**	.566**
頭・首を保持する技術			.375**	.291**
人形の重さを支える技術				.211*
沐浴をしながら様子観察をする技術				

注) ** $p < .01$) * $p < .05$

4. 乳児養護体験得点と困難に感じる沐浴技術内容の因子との関係

乳児養護体験得点と困難に感じる沐浴技術内容との関係を見るために、乳児養育体験得点(見たことがある・触れたことがある・抱いたことがある・あやしたことがある・世話をしたことがある)を独立変数、困難に感じた沐浴技術内容(因子)を従属変数とした分散分析を行った(表4～8)。有意差があった養護体験は「乳児を世話した体験」(表8)である。主効果が示されたものには多重比較(Tukey法)を行った。

乳児を世話した体験得点では、「人形の重さを支える技術」の主効果が認められ($F(2,108) = 6.64, p < .05$)、Tukey法による多重比較の結果、「ない」が「1～2回ある」より有意に得点が高いという結果であった。

表4 乳児を見た養護体験得点と困難に感じる沐浴技術

	乳児を見た体験			F値
	a. なし (n=11)	b. 1～2回 (n=37)	c. 3回以上 (n=76)	
事故予防に関連する技術	12.00 (2.61)	10.84 (2.62)	10.66 (2.35)	1.44
頭・首を保持する技術	6.27 (1.10)	6.76 (1.28)	6.07 (1.19)	4.05
人形の重さを支える技術	6.55 (1.04)	6.22 (1.44)	5.95 (1.64)	.93
沐浴をしながら様子観察をする技術	8.73 (1.79)	8.22 (1.95)	7.62 (2.27)	1.88

注) 小数点第三位で四捨五入した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

表5 乳児に触れた体験得点と困難に感じる沐浴技術

	乳児に触れた体験			F値
	a. なし (n=14)	b. 1～2回 (n=39)	c. 3回以上 (n=71)	
事故予防に関連する技術	11.64 (2.28)	10.97 (2.66)	10.59 (2.38)	1.17
頭・首を保持する技術	6.43 (1.09)	6.56 (1.25)	6.29 (1.24)	1.79
人形の重さを支える技術	6.29 (1.27)	6.00 (1.54)	6.08 (1.60)	.18
沐浴をしながら様子観察をする技術	8.93 (1.49)	8.05 (2.06)	7.61 (2.27)	2.41

注) 小数点第三位で四捨五入した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

保育者を目指す学生の乳児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容との関係

表6 乳児を抱いた体験得点と困難に感じる沐浴技術

	乳児を抱いた体験			F値
	a. なし (n=22)	b. 1～2回 (n=38)	c. 3回以上 (n=64)	
事故予防に関連する技術	10.86 (2.49)	11.24 (2.51)	10.58 (2.43)	.85
頭・首を保持する技術	6.27 (1.08)	6.42 (1.45)	6.22 (1.18)	.32
人形の重さを支える技術	5.86 (1.42)	6.24 (1.48)	6.06 (1.62)	.42
沐浴をしながら様子観察をする技術	8.27 (1.70)	8.16 (2.18)	7.61 (2.27)	1.19

注) 小数点第三位で四捨五入した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

表7 乳児をあやした体験得点と困難に感じる沐浴技術

	乳児をあやした体験			F値
	a. なし (n=26)	b. 1～2回 (n=42)	c. 3回以上 (n=56)	
事故予防に関連する技術	11.42 (2.06)	11.00 (2.78)	10.43 (2.35)	1.62
頭・首を保持する技術	6.46 (1.10)	6.45 (1.48)	6.09 (1.08)	1.35
人形の重さを支える技術	6.27 (1.54)	6.10 (1.57)	5.98 (1.53)	.31
沐浴をしながら様子観察をする技術	8.77 (1.61)	7.86 (2.39)	7.52 (2.12)	3.10

注) 小数点第三位で四捨五入した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

表8 乳児を世話した体験得点と困難に感じる沐浴技術

	乳児を世話した体験			F値	多重比較
	a. なし (n=47)	b. 1～2回 (n=28)	c. 3回以上 (n=49)		
事故予防に関連する技術	11.04 (2.49)	11.5 (2.33)	10.24 (2.42)	2.67	
頭・首を保持する技術	6.38 (1.31)	6.61 (1.40)	6.29 (1.24)	2.25	
人形の重さを支える技術	5.74 (1.53)	6.96 (1.17)	5.90 (1.57)	6.64**	a < b
沐浴をしながら様子観察をする技術	8.23 (1.97)	8.21 (2.44)	7.39 (2.10)	2.29	

注) 小数点第三位で四捨五入した。 ** $p < .01$ * $p < .05$

IV. 考察

1. 乳児養護体験得点と困難に感じる沐浴技術内容

保育者を目指す学生が困難に感じる沐浴技術内容には、「事故に関連する技術」「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」「沐浴をしながら様子観察をする技術」の4つの因子が抽出された。新生児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容の研究²³⁾においても、「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」「沐浴をしながら様子観察をする技術」因子が抽出されていた。また、木下・谷野 (2013)²⁴⁾ は、看護学科と幼児教育学科の沐浴演習で学生が難

しいと捉えた沐浴技術内容で最も難しいと捉えていた技術は、首や頭部の固定をすること、背中を洗う時に腹臥位へと体位交換をするところであると指摘している。これは「首の固定」に困難さを感じた今回の結果と同様である。このことから、これら3因子は学生が共通に困難に感じる技術内容であることが示唆された。

本稿では「事故に関連する技術」因子が抽出された。実際に沐浴場面における事故とその予防教育の必要性については指摘されている(行光・氏平・木下・橋本2004²⁵⁾、氏平・行光・木下・橋本2005²⁶⁾)。学生が「事故に関連する技術」に困難さを感じていることは、事故を予防しようとする意識の現れであるとも推測される。

「乳児を世話した体験」得点だけが、「人形を支える技術」の主効果が認められ、体重比較の結果、「1～2回」が「なし」より有意に得点が高い傾向を示した。乳児の世話をした体験がない学生は乳児を抱いたりあやしたりといった養護に関する体験自体がないと考えられる。従って、3kgの沐浴人形の重量を重いと感じ、その重さを支えながら沐浴という養護技術をしていくことに困難さを感じていると考える。

養護体験を回数で尋ねる方法をとっているが、1日または10年以上かけて体験した学生もいると推測されるため、体験の継続性や期間を設けた尋ね方を検討する必要がある。また、体験した「経験知」は時間経過とともに薄れていくだろう。

2. 今後の教育方法について

困難に感じる沐浴技術内容には、「事故に関連する技術」「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」「沐浴をしながら様子観察をする技術」の4つの因子が抽出された。

「事故に関連する技術」因子の下位項目には、「湯の温度の調整が難しかった」「衣服の着脱が難しかった」「顔・鼻・耳に水がかかることが難しかった」があり、それぞれ、「熱傷の事故」「脱臼の事故」「溺水の事故」と関連している。これは、学生が保育現場における事故の内容を理解しているからこそ、それを回避しようという思いがあると考えられる。事故予防には、細心の注意を払いながら繰り返し練習を重ねて習得していく必要がある。

次に、「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」因子が抽出された。頭と首の支えは親指とその他の四指及び手掌で頭部下方から首にかけて広範囲に支える技術であり、手と指の動きを上手に協応することが求められる技術²⁷⁾でもある。この「頭・首を保持する技術」は何度もこのポジションを練習する必要がある。児頭をいかに適切に固定するかということは、沐浴を受ける子どもや沐浴を実施する学生にとって安心・安全な沐浴技術につながると思われる。子どもの発達段階に応じた抱き方の技術を繰り返し練習し習得する必要がある。

また、「手にかかる重量の実感」は、沐浴人形を本物の人間と想定しながら安心・安全な沐浴を実践しようと思えばこそ感じる責任の重さであろう。窒息等の事故があるからこそ、その

リスク回避の心理が潜在している可能性も示唆された。それは新生児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容と同様の結果であったことから、保育者をめざす学生が共通に感じる技術内容であると考えられた。

更に、「沐浴をしながら様子観察をする技術」は、沐浴技術と観察技術を同時に行う「応用」である。沐浴は全身を洗うことから、子どもの全身観察の機会でもある。観察の目的と観察項目と状態との関係を理解して沐浴を行うことが重要である。沐浴技術のみ重視された手技的教育は沐浴される子どもの気持ちを配慮することに重きを置かれない。沐浴の目的の理解や沐浴される子どもの気持ちを配慮したケアの提供をする必要がある。

上記以外の要因も考えられるため、今後、沐浴技術演習の教育方法と学生が困難に感じる教育内容との関連について、より詳細に検討する必要があると考えられる。

V. まとめと今後の課題

保育者をめざす学生が困難に感じる沐浴技術内容には、「事故に関連する技術」「頭・首を保持する技術」「人形の重さを支える技術」「沐浴をしながら様子観察をする技術」の4つの因子が抽出された。乳児を世話した体験が、「ない」学生は、「1～2回」体験した学生より「人形の重さを支える技術」に困難さを示した。対象者人数が少ないことから今回の研究結果を一般化することは困難である。また、養護体験を回数で尋ねているが、それはどのくらいの期間をかけて体験しているのか、体験した時点からどのくらい経過しているのか、不明である。体験の質問内容を検討する必要がある。

付記

利益相反に関する開示事項はありません。

引用文献

- 1) 中央教育審議会 (2000) 「少子化と教育について」、文部科学省。 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm, 2017年9月11日。
- 2) 原田正文 (2006) 『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会
- 3) 中野由美子 (2001) 「親子の関係性の変貌と子育て支援の方向性」『家庭教育研究紀要』24, pp.28-39.
- 4) 柳瀬洋美 (2002) 「こころを育む親支援—現代の子育て不安とこころの自立」『家庭教育研究紀要』25, pp.19-23.

- 5) 小川博久 (2002) 「保育基本問題検討委員会最終報告 今日の乳幼児の危機と保育の課題」『保育学研究』40(1).pp.160-165.
- 6) Fogel,A.D & Melson, F & Mistry, J. (1986) .Conceptualizing the Determinants of Nurturance, A Reassessment of Sex Differences. In Fogel, A & Melson, G.F (eds) ,Origins of nurturance (pp55-67) . Lawrence Erlbaum Associates.
- 7) Fogel, A.D & Melson, G.F. (1989) ,子どもの養護性の発達 小嶋秀夫(編)『乳幼児の社会的世界』,有斐閣,pp.170-186.
- 8) 小川佳代, 蔡玲子, 野口純子, 三浦浩美, 竹内美由紀, 舟越和代, 宮本政子, 大地明枝 (2010) 「地域子育て支援事業の効果に関する研究—母親の親性の発達に影響する要因—」『小児保健研究』69(3).pp.432-437.
- 9) 榎澤令子 (2011) 「幼児期における乳児に対する養護性測定法の検討」『発達研究』(25) .pp.47-54.
- 10) 榎澤令子 (2011) 「大学生における養護性nurturanceと性格特性との関連」『日本女子大学人間社会研究科紀要』16.pp.143-151.
- 11) 榎澤令子, 福本俊, 岩立志津夫 (2009) 「大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性(nurturance)へ及ぼす影響」『教育心理学研究』57.pp.168-179.
- 12) 井森澄江・岩治まとか (2010) 「女子大学生における親準備性の発達(1)」『東京家政大学研究紀要』50(1).pp.143-149.
- 13) 岩治まとか・井森澄江 (2010) 「女子大学生における親準備性の発達(2)」『東京家政大学研究紀要』50(1).pp.151-158.
- 14) 川瀬隆千 (2010) 「大学生の親準備性に関する研究」『宮崎公立大学文学部紀要』7(1).pp.29-40.
- 15) 岩治まとか・井森澄江 (2011) 「女子大学生における親準備性の発達(4)」『東京家政大学研究紀要』51(1).pp.121-128.
- 16) 扇原貴志・首藤敏元 (2016) 「大学生における過去の乳幼児との接触体験とその際に抱いた感情」『埼玉大学紀要教育学部』65(1).pp.1-14.
- 17) 松本なるみ・佐藤隆弘 (2018) 「青少年にみる「養護性」の形成と発達」『東京家政大学研究紀要』58(1).pp.83-90.
- 18) 花沢成一, 松浦純 (1986) 「男女青年における対児感情と乳児接触経験との関係」『日本教育心理学会第28回総会発表論文集』pp.356-357.
- 19) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一 (2000) 「青年期男女における親準備性の性差および母性度・父性度の発達—親性準備性の研究(1)—」『母性衛生』41(4).pp.492-505.
- 20) 北村万由美 (2012) 「少子化に影響を及ぼす要因の研究—大学生の意識調査から—」『看護・保健科学』12(1).pp.46-55.
- 21) 永瀬悦子 (2020) 「保育者を目指す学生の養護体験と養護技術との関係—新生児養護体験と困難に感じる沐浴技術内容に着目して—」『保育者養成研究』4.pp.71-80.
- 22) 木下照子・谷野宏実 (2013) 「A大学学生が難しいと捉える沐浴技術の傾向」『新見公立大学紀要』(34).pp.41-43.
- 23) 前掲21)
- 24) 前掲22)
- 25) 行光美音子, 氏平美智子, 木下照子, 橋本智恵美 (2004) 「母性看護学臨地実習における看護学生

- のヒヤリ・ハットまたは医療事故体験の実態調査」『第35回日本看護学会論文集』 pp.24-26.
- 26) 氏平美智子，行光美音子，木下照子，橋本智恵美(2005)「母性看護学臨地実習における看護学生のヒヤリ・ハット体験から考える事故予防教育」『第34回日本看護学会論文集』 pp.137-139.
- 27) 石村由利子(2016)『根拠と事故防止からみた母性看護技術』医学書院.pp.464.

